初年度の活動を振り返って

採択の知らせを受け取って間もない 2008 年 7 月 3 日、時計台ホールにて「GCOE 拠点説明会」を開いた。わたしたちの COE は、大学院生や PD など次世代を担う若手研究者たちがイニシアチブを発揮できる運営をめざしていたため、なによりもまず彼ら彼女らに拠点の発足を報告し、参加を呼びかけたかったからである。手作りのポスターを、COE の基盤となるいくつもの研究科と研究所に貼り出したものの、急な呼びかけであったため、どれだけの学生が集まってくれるのか、正直言って不安もあった。しかし、不安はすぐに拭い去られた。開始時間が近づく頃には、大部屋は埋め尽くされ、別の部屋から椅子を運び込まないとならないほどだった。若手研究者が COE に寄せる関心の高さを、あらためて思い知った。説明の後、全員に自己紹介をしてもらった。百数十人の若手研究者が、次々と立って自分の研究について語るのは、前代未聞の光景だったろう。全員が語り終えるのに 1 時間半はかかったが、みんな熱心に聞いていた。このときに関心が近いことがわかった者どうしが、研究科の枠を超えて研究グループを作った例もあるそうだ。わたしたちの COE は、こうして始まった。

初年度である 2008 年に年度目標として掲げたのは、①**拠点の運営体制の確立**、②**グローバルネットワークの構築**、③**次世代研究者の活性化**の 3 点であったが、そのうちでもとりわけ心がけたのが、若手がイニシアチブをもって参加できる体制づくりであった。そのための第 1 歩が冒頭に挙げた大集会である。次の 1 歩が活動開始まもない 9 月に企画した ISA（国際社会学会）大会での学会動向調査であり、9 名が参加して、各分野での最先端の動きに直接に触れ、インパクトのある学会報告とはどういうものかを身を持って体験してきた。「国際学会と言っても、頑張ればやれそうだ」という感想をもった者が多く、帰国報告会でその感触は大勢に伝わり、グローバル化への気運が一気に高まった。活動の機会を待ち構えていたような若手研究者たちはあらゆる機会に積極的に応募してくれて、次世代研究プロジェクトには 42 件の応募があって 20 件を採択、海外発表渡航支援は、半年という短い期間であったにもかかわらず、12 名を送り出すことができた。

初年度の活動の最大のピークは何だったかと言えば、「次世代グローバルワークショップ」だろう。1 月に開催して、**海外 26 名**、**国内 28 名の次世代研究者**と **7 名の海外アドバイザー**が一堂に会して、2 日間 15 セッションで報告した。参加国は、韓国、台湾、タイ、ベトナム、ネパール、インド、フランス、スウェーデン、フィンランド、カナダ、そして日本。「ネパールの人と議論したのは初めて」というフランス人がいたり、生まれて初めての雪に震えるタイの学生がいたり。貴重な出会いの場であるばかりではなく、精選された報告のレベルの高さにもみな驚き、満足した。世界から寄せられたプロポーザルを読んで招聘する報告者を選考し、セッションを組み立て、司会や討論者を決めて、会場係までして、という準備を

したのも京都大学の若手研究者たちだった。いったいどんなことになるのかと不安もあったろうが、彼ら彼女たちの努力はみごとに報われた。わたしたちの COE では、これからの 5 年間、毎年「次世代グローバルワークショップ」を開催することを海外パートナー拠点の皆さんに約束したので、来年も会えるといいね、と皆が言い交わしていた。

このような活動を支えたのが、COE の海外パートナー拠点となることを承諾してくれた諸外国の大学・研究機関とのグローバルネットワークである。京都大学の教員たちと共同研究等の実績のあるところを中心に広げていったが、歓迎してくれる大学が多く、当初は 8 地域 8 大学を予定していたが、**12 地域 13 機関**と予定を上回る数の参加を得た。これらの大学・研究機関との間では、**アジア版エラスムス・パイロット計画**と名付けた学生と教員の交換プログラムを開始し、共同研究やシンポジウムの共同開催も行って、日常的な交流を続けていく予定である。

初年度を終えて、「よくやった」というのが正直な感想である。実質半年であったのに、立ち上がりも早くできて、課題はほぼ予定した以上の水準で達成された。研究科の枠を超えた研究会がいくつも始まり、海外パートナー拠点の若手研究者との共同研究プロジェクトも動き出している。着任早々からフル回転してこれらの事業を支え、牽引してくれた COE 教員・COE 研究員の皆さん、そして事務局の皆さんにお礼を言いたい。もちろんそれぞれの役割を果たして頑張ってくださった推進員の先生方や、学生たちにも。

自画自賛に陥るのは避けなければならないが、初年度の達成に誇りをもって、次年度以降につなげていきたい。

拠点リーダー

落合恵美子

平成20年度実績報告書

教育研究拠点形成実績の概要

本拠点形成の目的は、現代世界の直面する全体的社会変化を「**親密圏と公共圏の再編成**」ととらえ、社会学を中心とする関連社会科学の総合によって分析・解明する新しい学問分野を開拓して実践的政策的提言を行うとともに、この新分野の開拓者たりうる人材を養成し、アジアを中心とした教育研究のグローバルネットワークを組織することにある。

初年度である 2008 年度は、①**拠点の運営体制の確立**、②**グローバルネットワークの構築**、③**次世代研究者の活性化**を年度目標として掲げた。

2008 年度の拠点形成の計画については、ほぼ計画の通りに進行している。【運営体制】【人材育成】【研究活動】については、計画は全て達成された。**海外パートナー拠点**については 8 地域 8 大学を予定していたが、**12 地域 13 機関**と予定を上回る成果をあげた。【成果公開】については、各プロジェクトの成果提出を 2009 年 4 月にしたために公開には至らなかったが、現段階では成果が提出されて公開に向けて作業を開始している。リーディングスについては編集委員会を設置して、作業を進めており、2009 年度には出版されることになっている。初年度の半年間の成果としては、計画は十分以上に達成されたと考えている。以下、【運営体制】【人材育成】【研究活動】【成果公開】の 4 つの側面から、2008 年度の拠点形成実績の概要を報告する。

【運営体制】

(1) 拠点の運営体制の確立

最終決定機関である**運営委員会**（毎月開催）は、事業推進担当者 11 名、COE 准教授 2 名に加えて、COE 助教・研究員の各代表者を正式メンバーとし、関係者の傍聴を認めて、若手研究者の意思決定への参加と透明性を高める努力をした。加えて、機動性の高い運営のために、リーダー、サブリーダー、COE 准教授による**拠点会議**（毎週開催）をおき、**教育実践、研究推進、成果公開**の 3 部門の統括のもとに、各委員会が企画・分業する体制をとった。また**アドバイザリー委員**を委嘱し、国際シンポジウムなどの機会を利用して意見をいただいている。

(2) COE教員・研究員・RA・TA等の採用

COE 准教授 2 名とともに、**COE 助教 4 名**、**COE 研究員 5 名**、を公募して厳正な審査の上採用した。また **RA20 名**、**TA8 名**についても公募して厳正な審査の上採用し、教育研究活動の活性化をはかりつつ、学生に教育研究の実践的経験の機会を与えた。実務を担当する事務局は、語学力や専門性を有する特定有期職員を採用し、強力な事務体制を整えた。（**日本学術振興会特別研究員 1 名**についても公募の上採用した。）

[COE教員は5名の予定だったが、優秀な者の応募が多かったので6名採用とした。COE研究員は9名の予

定だったが、2名分を助教に振り替え、7名採用とした。ただし事情により着任が2009年度となる者が2名あったので、2008年度中の着任は5名となった。RA・TAは33名の予定だったが、RAの勤務時間を増やしたために人数は減って28名となった。]

(3) 海外パートナー拠点とのネットワーク構築

アジア版エラスムス・パイロット計画に参加する**海外パートナー拠点**として、当初計画を上回る **12 地域 13 機関**から連携の承諾を得た。全海外パートナー拠点が参加したキックオフ・シンポジウム（2008 年 10 月）に加えて、海外パートナー拠点の多くが参加した国際研究集会（2009 年 1 月）、次世代グローバル・ワークショップ（同）等において「アジア版エラスムス・パイロット計画」の具体化について実質的な検討を実施した。また本拠点独自の交流のための**協定書（MOU）案**を作成し、海外パートナーと交渉を開始した。

[海外パートナー拠点は 8 地域 8 大学の予定だったが、その後の交渉により、ネパール、フィリピン、ベトナム、タイの大学・研究機関を追加することができた。大きな改善点と言えよう。]

【人材育成】

(1) アジア版エラスムス・パイロット計画による海外派遣と海外招へい

次世代研究者の**海外派遣 4 名**(オランダ、タイ、ハンガリー、イギリス)、**海外招へい 3 名**(韓国 2 名、フランス 1 名)、教員は**海外招へい 3 名**（韓国 2 名、タイ 1 名）を実施した。

[2年目以降の達成目標として、次世代研究者の海外派遣3名、海外招へい4名、教員の海外派遣1名、海外招へい2名を掲げている。本年度は年度途中からの開始なので短期間でも認める特例処置としたのではあるが、次世代研究者・教員ともに合計数は予定を達成することができた。海外パートナー拠点の積極的参加によるものである。]

(2) 次世代グローバル・ワークショップ

2009 年 1 月に、**次世代グローバル・ワークショップ（次世代研究者海外 26 名、国内 28 名、海外アドバイザー7 名**参加)を開催した。次世代研究者の国際研究交流におけるイニシアティブ養成を目的としたこのワークショップでは、事前に報告者に英語ペーパーを課し、ネイティブ・チェックやプレゼンテーションの事前指導を行うとともに、**次世代研究者による実行委員会**を組織し、企画・運営、フィールドトリップの組織等を経験する機会とした。報告ペーパーは、ワークショップ終了後の加筆修正を経て、**プロシーディングス**として発行した。本ワークショップは、アジアと欧米の多様な社会から多くの次世代研究者の参加を得た類のない国際会議であり、報告の水準も高く、終了後に国内外の参加者を対象に実施したアンケート等においても開催の意義が高く評価され、今後さらに発展継続させることを確認した。

(3) 海外学会発表渡航支援・海外ワークショップ等

バルセロナでの **ISA**（国際社会学会、2008 年 9 月）へ **9 名**の大学院生を派遣して学会動向調査を実施し、帰国後その報告会を行った。また海外学会での発表者 **12 名**に**海外学会発表渡航支援**をおこなった。この他にも、次世代研究者による研究プロジェクト（後述）

の海外での**国際研究会開催**（ソウル大学、2009 年 3 月）、インドネシアでの**国際学生ワークショップ**への参加（インドネシア大学、2008 年 11 月）等、初年度にもかかわらず当初計画どおりの活発な次世代研究者の国際的活動を実施することができた。

[2年目以降の海外学会発表渡航支援の達成目標は12回であるが、本年度は年度途中からの開始であったにも拘わらず、12回という計画通りの実績を上げることができた。]

(4) グローバル学際教育プログラムの構築

初年度である 2008 年度は、次年度以降実施するカリキュラムを検討し、アジア版エラスムス・パイロット計画による**海外パートナー拠点からの招へい教員**、および**事業推進担当者**が担当する 2 コースの**オムニバス講義**、基礎コミュニケーション能力の涵養をめざした**語学科目**、**英語プレゼンテーション能力向上のための特別演習**の開講等を内容とする次年度カリキュラムを確定した。また、事業推進担当者を中心とした 6 研究科 2 研究所に所属する教員が自らの専門領域を中心として講義をおこなう**専門科目**や **COE 教員による科目**を体系化し、本拠点を構成する専攻の学生が広く履修しうる体制を整えた。

(5) インターンシップの準備とキャリアパスの多様化

NGO の活動に参加中の PD が**国際 NGO の代表者を集めた国際シンポジウム**をオーガナイズした。メディア関係では、現職の **NHK エンタープライズ・エグゼクティブプロデューサー**が講師を務める**ドキュメンタリー番組制作の授業**を開講した。2009 年度には**京都新聞総合研究所**の協力により「**現代社会とメディア ― ジャーナリズムの現場から ―**」を開講することを決め、内容の打合せを行った。

(6) 次世代研究プロジェクト　（【研究活動】参照）

(7)「リサーチ・ライフ・バランス」プログラムの研究と開発　（【研究活動】参照）

(8) 学位取得者

本拠点で中心的に活動する学生のみを対象とした場合、今年度の博士号取得者は**文学研究科 5 名**、**法学研究科 1 名**、**経済学研究科 1 名**、**その他 2 名**（海外の所属大学で取得した留学生）、計 9 名である。なお、2008 年 7 月から 2009 年 3 月までの本 COE の関連する専攻における学位取得者は、文学研究科行動文化学専攻（8 名）、農学研究科生物資源経済学専攻（1 名）、法学研究科法政理論専攻（14 名）、人間・環境学研究科共生人間学専攻（11 名）、教育学研究科教育科学専攻（5 名）、経済学研究科経済学専攻（32 名）、計 71 名であった。

[2年目以降の博士号授与数の達成目標は8名、関連分野を含め12名としている。本年度は年度途中からの開始であったにも拘わらず、COEの事業に深く関わってきた者に限っても、京都大学のみで7名、京都大学への留学生であり所属する大学で博士号を授与された者2名、計9名という十分な成果をおさめた。]

【研究活動】

(1) 研究班

事業推進担当者は **5 つの研究班**（**理論研究班**、**歴史研究班**、**フィールド調査班**、**数量調査班**、**政策研究班**）のいずれかに所属して、研究活動をおこなっている。フィールド調査

班には多数の次世代研究プロジェクト（後述）が所属しており、**海外調査**も頻繁に行って成果をあげた。政策研究班でも、次世代研究プロジェクトが海外調査を実施し、また韓国や台湾の研究者を招へいして**国際シンポジウム「福祉レジーム変容の国際比較」**を開催した。数量調査班は、アジア諸国の数量調査データの収集を進める一方、1 月に韓国・ベトナムの研究者と研究打合せをおこない、2009 年度以降に**アジアの親密圏に関わる統一的な数量調査**を実施することを合意した。理論研究班は、学外・国外の研究者を含めた研究会を組織して「アジアの近代」についての理論的研究枠組みを整理してきた。歴史研究班では、アジア美術における親密圏の表象についての国際シンポジウムを実施した。また**研究班横断的な全体研究会**を **2 回**実施し、第 1 回は数量調査班と政策研究班の合同、第 2 回はフィールド班が担当した。

(2) 国際共同研究

国際共同研究は **6 プロジェクト**が組織されており、海外パートナー拠点研究者などと共同で、2 年間の研究活動をおこなっている。国内外での共同調査や国際シンポジウムも数多く行われた。また**「ビジュアルカルチャーと親密圏」 定例研究会**など、各プロジェクトの研究会も開催されている。プロジェクトでは、2008 年度は調査研究期間として、2009 年度にはプロジェクトごとに国際シンポジウムが開催される予定である。

(3) 次世代研究プロジェクト

本拠点では、大学院生や PD など若手研究者のイニチアチブによる研究活動を促進することにより、実践的なかたちでの人材育成を図っている。次世代研究プロジェクトには、京都大学**「若手研究者研究活動経費取扱要領」**にもとづく「**次世代研究**」と、事業推進担当者の指導のもとでグループ研究などを行う「**次世代研究ユニット**」との、2 つの枠組みを設けている。前者は公募形式で **4 名**に対して研究助成が行われ、後者も公募して審査の上採択された **20 プロジェクト**が組織され、延べ **60 名**が参加した。海外調査や国際ワークショップを実施したプロジェクトも多い。社会的注目を受け新聞に取り上げられたプロジェクトもある。なお、2008 年度のこれらのプロジェクトについては、2009 年 4 月 6 - 7 日に、下記の「京都大学の男女共同参画に資する調査研究」**4 プロジェクト**を合わせた **28 プロジェクト**の**成果報告会**を行った。

[2年度目以降の達成目標は23件である。本年度は年度途中からの開始であったにも拘わらず、計24件を実施することができたので、次世代研究者の活性化という目的は達したと言えよう。]

(4)「リサーチ・ライフ・バランス」プログラムの研究と開発

京都大学女性研究者支援センターとの連携により、「**京都大学の男女共同参画に資する調査研究**」を募集して、女性医師の支援、若手研究者の幸福感、研究者の育児支援、事務職員の昇任を研究テーマとして **4 プロジェクト**を実施した。京都大学医学部付属病院の医師が実施した調査研究とその成果である公開シンポジウム「女性医師が働き続けるために」は新聞にも取り上げられ、社会的注目を集めた。

(5) 国際シンポジウムの開催

キックオフ・シンポジウム「親密圏と公共圏の再編成に向けて」（2008年10月25日）では、**海外パートナー拠点の研究者2名**を含めた**6名**の報告者が、現代アジアにおける親密圏と公共圏の再編成の軸をなす人口学的条件、ジェンダー、ケア、家族、国際移動、福祉国家、家族法、人的投資などについて報告し、相互に論点が重なりあっていることを確認した。国際日本文化研究センターと共催した**国際研究集会「いま構築されるアジアのジェンダー：人間再生産のグローバルな再編成」**（2009年1月8～10日）では、**15名の海外研究者**を招いて、女性の国際移動、および家事の変容と主婦の誕生について討議した。他に、**国際ワークショップ「統合される経済のもとでの地域変容と社会政策」**（2008年10月6日～12月12日の間に9回）、**国際学生ワークショップ 「東アジア・東南アジアにおけるPopular Visual Imagesと親密圏」**（ジャカルタ、2008年11月3～4日）、京都大学文学研究科主催・GCOE共催**国際シンポジウム「世界の中の『源氏物語』－その普遍性と現代性－」**（2008年12月13～14日）、国立女性教育会館主催・GCOE共催**「女性のエンパワーメント国際フォーラム」**（2008年12月20～21日）、移住労働者と連帯する全国ネットワーク主催・GCOE共催**「アジアの労働移動とNGO活動」**（2009年1月12日）、ソウル大学日本研究所・GCOE共催**「東北アジアにおけるコリアン・ディアスポラの親密圏と公共圏」**（ソウル大学、2009年3月21～23日）他、多くの国際シンポジウムや国際ワークショップを開催した。

【成果公開】

(1) 次世代グローバルワークショッププロシーディングスの発行

英文で発行。**54 名の次世代研究者**（**日本 28 名**、**海外 26 名**）の報告論文を集める。編集の過程で、ネイティブ・チェックを行い、英語での論文執筆の指導も行った。

(2) リーディングス「アジアの家族と親密圏」編集

日本、**韓国**、**ベトナム**、**タイ**、**インド**の専門家による**編集委員会**を組織して、第 1 回編集会議を開き、研究成果の収集方針を決めた。日本については先行し、収集済の論文の内容を海外研究者に紹介して検討した。日本の業績を代表する **2 冊の単著の英語訳**を進めている。

(3) 基本文献の多言語への翻訳と共有

海外パートナー拠点研究者との研究枠組みの共有のために、本 COE の先行プロジェクトの成果 ***Asia's New Mothers*** **の購入・配布**、その他の文献の**中国語訳**、**韓国語訳**、**タイ語訳**を行った。

(4)『京都大学　男女共同参画への挑戦』の出版

京都大学女性研究者支援センターと連携して、京都大学の教育研究環境をジェンダー視点から評価するため、上記の書籍にまとめて出版した。

(5) 広報活動

日本語と英語を併記した**リーフレット**と**ニュースレター Intimate and Public** を **2 号**発行

した。

また、**HP（http://www.gcoe-intimacy.jp/）**を立ち上げた。

教育研究拠点形成に係る具体的な成果

【世界的な教育研究拠点形成に向けて改善・整備されたこと】

(1) **海外パートナー拠点との連携ネットワーク**が整備されたことにより、アジア地域内およびそれを超えて広がる**グローバルな教育研究の協力体制**の基盤が構築できた。さらに、このネットワークを活用した次世代研究者による共同研究も始まっている。

(2) **アジア版エラスムス・パイロット計画**による次世代研究者および教員の交換が活性化し、将来の**アジア版エラスムス実現への足がかり**ができつつある。

(3) 本事業によって、**海外パートナー拠点**も活性化し、学部生の交流の提案、共同研究プロジェクトの提案などもされ、**アジア地域内のアカデミックな交流**が活発化した。

(4) 大学院生・PD・研究員等が、次世代ワークショップでの英語発表や司会・運営、英語論文執筆、海外学会での発表、国際セミナーのオーガナイズなどの経験を積むことにより、**国際的な舞台で活躍する実力と自信**を飛躍的に高めた。

(5) **研究科横断的な拠点形成**により、大学院生・PD・研究員等の研究科を超えた日常的交流が生まれて、**学際的な研究プロジェクト**や**研究会**も誕生している。

(6) 次世代研究プロジェクトの募集に対し、大学院生・PD・研究員等が非常に積極的に応募して、**国際的・学際的なネットワーク力を駆使した企画力**を磨くことができた。

(7) COE 教員・研究員の雇用により、本学以外の出身の、特に**外国での大学院教育や博士号取得の経験のあるスタッフ**を迎えることができ、学生にもよい刺激を与えている。

(8) 全員が英語に不自由がなく韓国語にも対応できる、**世界的拠点にふさわしい事務局**を整備した。

【研究等によって得られた新たな知見】

⑴ 社会学、政治学、経済学、地域研究といった領域の**学際的な結合**により、家族を中心とした**親密圏のありかた**が、**福祉国家や社会政策の枠組み、労働市場のありかた、国際労働移動のパターンなどの組み合わせ**により規定されている具体像がさまざまな角度から浮かび上がってきた。

⑵ アジア諸社会を比較対照することにより、東アジア・東南アジアの多様な諸社会に、**共通のトレンド**が生まれていることが分かってきた。女性の主婦化、家族主義福祉レジームと国際労働移動の結合、人的資源への投資という考え方の普及などである。

⑶国際的な連携により**国際労働移動**の**送り出し地域**と**受け入れ地域**を対にして見ることの重要性が明らかになった。

(4)**「アジア」の地域的共通性の形成**に**メディア**が果たしている役割の大きさが確認された。

(5) 親密圏と公共圏という枠組みでとらえにくい**「コミュニティ」という概念**がもつ可能性が、理論研究からもフィールド研究からも照らし出されてきた。

(6) リーディングス編集の過程で、アジア地域の研究者が互いの社会について表層的な知識しか持っていないとことが確認できた。階層差、中国的伝統とインド的伝統の影響、性規範の違いなどが重要な論点であることが見えてきた。

(7) 大学の男女共同参画についての調査研究では、女性研究者や女性医師の問題とされてきたことは、実は**男女に共通する働き方の問題**であることが指摘された。